



今日も全国を巡り、命への熱き思いを発信続ける（㈱ティア本社にて）

死と生に向き合い続けた 最期のありがとうを届けたい

葬儀業界の革命児と呼ばれる富安徳久さん（名古屋市中）。一八歳で業界に入り、東証一部上場企業を創業した。死とは、自分の使命とは何かを問い続けた。その歩みと想いとは？

生死一如

「子どもが亡くなる話なんて縁起が悪い。子どもが何と
思っているか」
私の「いのちの授業」を小学校で開催するに当り、あ
るPTAの役員が言われたそうです。もう十年以上も前
のことです。

私には一つの思いがありました。「死をタブーにしては
いけない。自然なものとしてありのままにみつめれば、
子どもの心に届き、生きる力となってくれる」
それは実体験からの確信でした。

景子を取るとき、四歳の弟・康平も一緒にいるかを
ずっと悩んでいました。そして、家族として一緒に見送
ろうと決めました。

天国に旅立ったとき、「お姉ちゃん、天国にいったから
ね」と話すと、分かったのでしょうか。「お姉ちゃん、お
姉ちゃん」とずっと泣いていました。

一ヶ月後、保育園の教室で突然ひとり立ち上がり、
「お姉ちゃん、死んじゃった」と大声で泣きだしまし
た。そのとき、先生が康平を抱きしめて一緒に泣いてく
れたそうです。

小学校一年生になったとき、テレビで子どもが亡くな
るシーンをみていると、康平がぼつり言いました。

鈴木中人

「もしオシが死んだら、お父さんお母さん、お姉ちゃん
のときよりもっと泣くよね。だって子どももいなくなっ
ちゃうから。オシ、死ねないね」
とても辛く悲しい体験でした。しかし、大切なこと
を心に刻んでいられると私は感じました。

いのちの授業では、「死」に向き合い、たくさんの子ど
もたちが、子どもなりに「死」を受けとめて、いのち＝
生きる思いを育んでくれています。

私たちは、死をタブーとして、生と死を分ける、対極
のこのこと「一線」を引いているのではないでしょ
うか。始まりと終わり、勝ちと負け、祝福ものと忌み嫌
うもの…。

生死一如（しじういちにち）。

生死は一つのこと。紙の裏表のように分けられるも
のではないこの仏教用語です。白ばかりでは白の存在は
みえません。黒があるからこそ白も見える。逆も真です。

「生」ばかりではなく、「死」もみつめてこそ、社会の実
相、いのちの営み、いのちの尊さを実感できるように思
います。

あなたの「生死」の思いを、いのちの授業として子ど
もたちにお伝えください。

竜馬が行く

一九六十年、愛知県宝飯郡一宮
町（現豊川市）に、長男として生
まれた。父（勝）と母（幸枝）は
果樹園を営んでいた。夏は豊川で
泳ぎ、冬は用水でスケートをした。
「元気で落着かない子どもでし
た。両親は農作業で忙しいので、
いつもおばあちゃんが面倒をみて
くれました」
明治生まれの祖母（りっ）は、
同じことを繰り返して話した。

「おばあちゃんも、お父さんも、
お母さんも先に生まれたから先に
死んじゃうんだ。だから、自分の
ことは自分で出来るようにならな
きゃね。人のために生きるんだよ、
笑顔でいるんだよ」
「不思議な家庭でした。親も「勉
強しろ」とは言わずに同じことを
言いました。自立の思いが自然に
心に沁み込んでいきました」
中学校では陸上に夢中になった。
成績は二百五十人中、いつも二百
番以下。受験を前に慌てて、猛勉
強を始めた。

「田舎で塾もありません。小学校
の先生の自宅に毎日通いました」
成績は五十番以内に急上昇。あ
る日、先生が「こんなに勉強して、

何か夢でもできたのか」と尋ねた。
その問いかけが胸に刺さった。
「何の夢もありませんでした…。
情けなさが胸を埋めました」
数日後、先生が「今、お前が読
むべき本がある」と、竜馬が行く
（司馬遼太郎）を勧めてくれた。

「幕末の志士が日本を変える志を
抱き、命懸けで突き進んでいく。
胸が熱くなるほど感動しました」
高校一年生の夏休み、一人で高
知県桂浜の坂本龍馬像を訪ねた。
「震えが起った。『人、この世に
生を得るは、事を為すにあり』の
竜馬の言葉が頭をよぎりました。
私にも絶対何かやることがある、
見つけてやると思いました」
維新の地・長州山口に憧れた。
山口大学経済学部合格。運命の
地となる山口に向かった。

学歴より感動

山口市内を歩くだけで、竜馬や
高杉晋作を思い胸が躍った。
下宿近くの喫茶店で、マスター
から「時給千円、世の中のために
なる仕事だよ」とアルバイトの誘
いを受けた。「何をするかは教えて
もらえませんでした。入学までの